

運動・スポーツへの参加意欲の向上のための学校体育の取り組みに関する一考察

A consideration of the effort at school physical education to improve the participating volition to gymnastic activity and sports

1K08B183-4 古矢優希子

指導教員 主査 吉永武史先生 副査 深見英一郎先生

【序 章】

子どもの運動能力の低下が問題となっている昨今だが、「運動能力や運動時間の二極化」が進行していることも指摘されている。2010（平成22）年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果では、1週間の総運動時間（体育授業は除く）の分布の結果から、過去1、2年の調査と同様、明確な二極化が見られた。

また、この調査の中で、運動部活動や地域スポーツクラブの所属の有無と運動時間の差が大いに関連していることが明らかになった。運動部活動や地域スポーツクラブへの参加は義務ではないために、この2つに所属していない生徒がいることや、この生徒達の総運動時間が少ないことは当然のことと言える。しかし、総運動時間が少ない生徒であっても、運動が「好き」「やや好き」と答えた生徒の割合が51.3%だったことを考えると、現在の運動部活動や地域スポーツクラブの在り方に改善の余地があると考えられる。

さらに、2008（平成20）年に改訂された中学校学習指導要領には、保健体育の教科目標に「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」という文言が入れられた。一概には言えないが、上記の結果から推測するに、現状では、現段階で運動を「しない」生徒が生涯にわたって運動に親しむことはないのではないかと危惧している。

こうした背景から、運動を「しない」生徒を減らし、二極化を解消するためには、すべての生徒に参加義務のある体育授業において、生徒の運動・スポーツへの参加意欲を高め、運動部活動の改善を行って、高めた参加意欲を運動部活動において発揮することが最善であると考えられる。このことから本研究では、学校体育、すなわち生徒の意欲を高める体育授業の実践と、すべての生徒が主体的に参加できる運動部活動への改善について考察し、運動・スポーツへの参加意欲の向上に向けた学校体育の取り組みの示唆を得ることを目的とする。

【第1章】

運動・スポーツへの参加意欲の構造について研究した結果、内発的動機づけと外発的動機づけの同一化的調整や、この下位要素であ

る「有能感」が運動意欲を持つための重要な要因であることが示された。また、この有能感が周囲の働きかけからも影響を受けることが明らかになり、意欲における体育授業や体育教師の重要性があらわにされた。

【第2章】

体育授業において参加意欲を高める要因として、目標・課題の設定、教材・教具、評価、雰囲気、声かけ、生徒との関係性が挙げられ、意欲促進には様々な手段があることが明らかになった。また、参加意欲を高める要素と有能感を高める要素は、ほぼ同じであることがわかった。さらに、意欲を高めるのに重要な教師の資質能力としては、コミュニケーション能力・マネジメント能力・生徒理解などが挙げられたが、やはり、体育の教師として適切な指導が行えるだけの教科指導力を有していることが大切であることが示唆された。

【第3章】

運動の機会を与える場として、すべての生徒のニーズに合った運動部活動を提供するには、志向や技能レベルの差異を認めつつ、それぞれが楽しめる供給システムの構築が必要だが、学校現場にその余裕はなく、指導する教員側の諸問題を解決することが、生徒主体の運動部活動への第一歩であることが明らかになった。

また、体育授業と運動部活動を連携させるには、学校の創意工夫による運動部活動の改善と、学校と地域が協力して運動部活動を支えるといった方策により、競技性にとらわれない運動部活動の在り方を模索する必要があると示唆された。そして、これらを進めるためには、指導者が競技スポーツ的な結果に左右されることなく、生徒の自主的・自発的な活動である運動部活動の主旨を理解して指導にあたることが重要であることが示された。

【結 章】

様々な工夫によって体育授業の中で運動・スポーツへの参加意欲を高め、より多くのニーズに応えられるように運動部活動を改善し、運動が好きという気持ちだけで運動部活動に参加できる環境を整えることによって、運動を「しない」生徒を減らすことができるという示唆を得ることができた。